

沖井千代子＝作

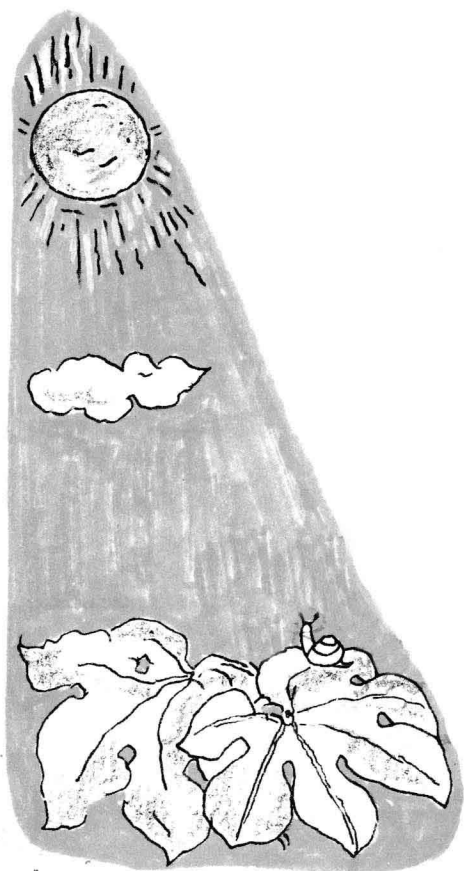
こちら、 はじめっ子対さく本部

小野かおる＝絵



こちら、 いじめっ子対さく本部

小野かおる＝絵



NDC●913

みんなの文学=11

165P/22cm

書名 ●こちら、いじめっ子対さく本部

作者 ●沖井千代子©

画家 ●小野かおる

発行 ●株式会社金の星社

〒111 東京都台東区小島1-4-3

電話・03(861)1861

振替・東京0-64678

印刷 ●平河工業社

製本 ●東京美術紙工

初版発行 ●1983年 1 月

ISBN4-323-00526-1

Printed in Japan

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛ご送付
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

はじめに

ねえ、いじめられたこと ある？

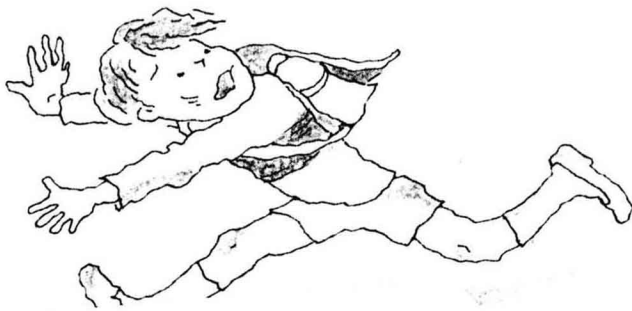
いじめっ子^こって、なんにもしないのに
いじわるするんだ。

ぼくと、いもうとの まみ、

そして、は、な、く、そ、ほ、り、く、ん

あつ まちがい、ほりくん。

三人^{にん}で 対^{たい}さく ねったんだ……。



●こちら、いじめっ子対さく本部／もくじ

底ぬけランドセル 7

ナナ美容室のかつら 22

正一さいがい対さく本部 41

魚よしせん魚店 61

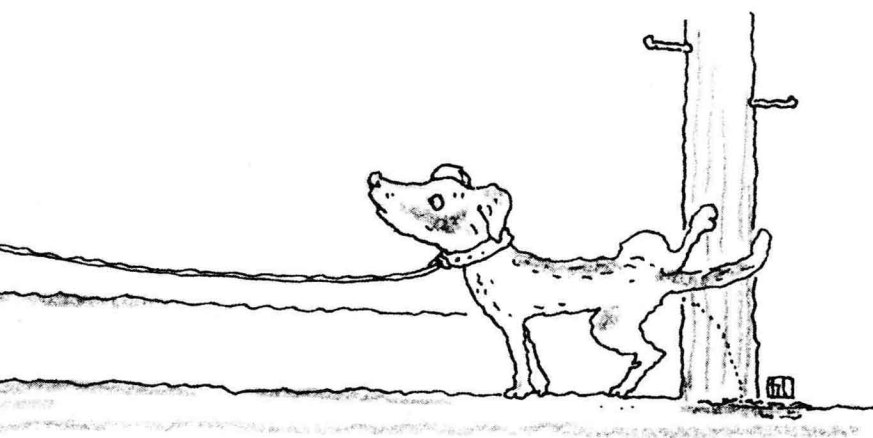
おとなはみんなわからない 77

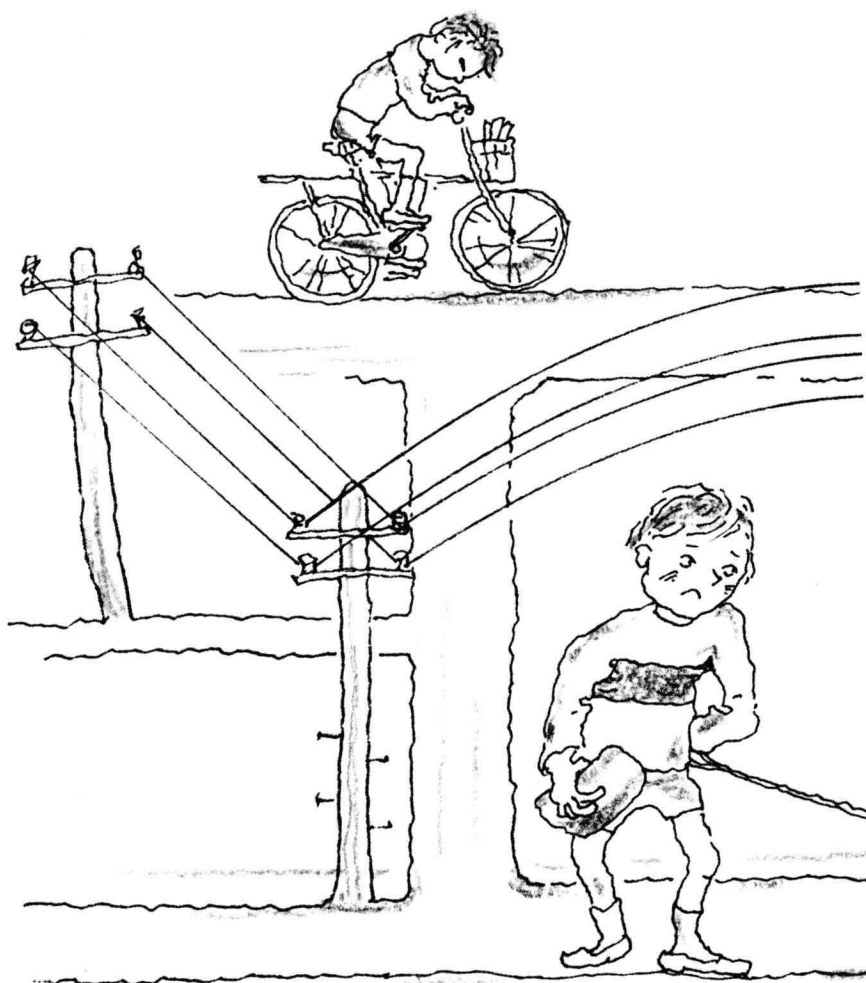
やろうぜは、なく、そ、ほり、くん 94

たいけつするとき 119

大時計は0時 142

あとがき 164

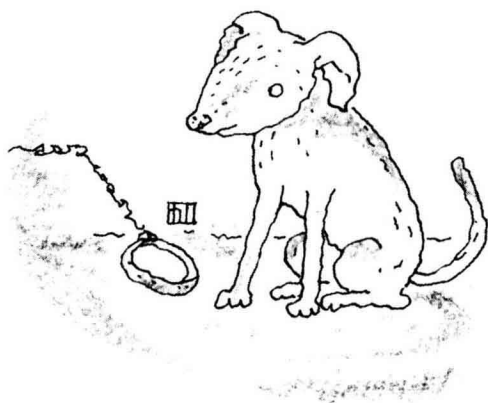




こちら、いじめっ子^{こたい}対^{たい}さく本部^{ほんぶ}

沖井千代子 作

小野かおる 絵



1 底ぬけランドセル



「れいじ、おきなさい。おそくなるわよ。」

お母^{かあ}さんのいそがしそうな声^{こえ}です。

「うん、わかったよ。」

れいじはねむそうに、へんじをしました。まだぼんやりしているれいじに、

「おい、おきろよ！」

声^{こえ}がきこえ、目^めの前^{まえ}に男^{おとこ}の子^この顔^{かお}が、うかびあがりました。

(正^{しょう}一^{いち}だ！)

いつも、ぱっちりと目をさまさせてくれる顔。いじめっ子の五年生の正一です。

（いやだなあ！）

れいじは、いそいでふとんにもぐりこみました。

とたんに、れいじのおなかがしくしく、頭がズキンズキンといたみだし、虫歯の根もとがうずき、へんとうせんまではれあがります。そのうえ、右足の親ゆびの、ウオの目までが、チクチクしはじめます。

（ああ、いやだなあ。）

お母さんがエプロンで手をふきながら、へやをのぞきました。

「おくれてもしらないわよ。」

「えい、やつ！」

ウサギが、すからとびだすように、れいじはふとんからとびだし

ました。

れいじの体で、いたいところがせいぞろいしていますが、お母さんにはしんはいかたくないのです。

お父さんのいないれいじの家では、お母さんがはたらいています。お母さんもれいじといっしょに、家を出るのです。

れいじが顔をあらっていくと、妹のまみとお母さんは、もう朝ごはんをたべていました。まみが、トーストにジャムをつけながらいました。

「お母さん、きょうの学級こんだん会、これる？」

「もちろんよ。その時間、お休みがもらえたの。みんながやりくりしてくれたのよ。」

「お母さん、教室まちがえちゃだめだよ。」

れいじがパンをとりながら、いいました。

「ぼくの教室きょうしつはね、入り口ぐちはい入ると、左ひだりにまがって、階かいだんあがると二つめの教室きょうしつだからね。」

「だいじようぶよ。この前まえの授業じゆぎやうさんかんにも、ちゃんと行いったでしよ。まちがえたりしませんよ。」

「だって、お母さんかあ、よくうつかりするんだから。」

「お母さんかあが？ とんでもない。そんなことありませんよ。」

「でもさ、お母さんかあ、すぐ、『あつ』とか、『しまった』とか、声こゑあげるんだもの。ぼく、そのたび、むねがドキンとするのさ。そんな時には、たいてい、お母さんかあ、なにかへまやつてるんだもの。」

「たまには、そんなことがあるかもしれないけれど、れいじの教室きょうしつぐらい、お母さんかあだってちゃんとおぼえていますよ。」

お母さんかあとまみは、ごはんをすませて立ちあがりました。

「行いってきます！」



まみはランドセルをせおうと、家を出ていきました。まみは二年下の、二年生です。

ごはんをすませ、れいじもランドセルをせおうとして、ひとところに目をとめました。底のぬいめが、ほころびています。

（そうだ。やぶれていたんだ。）

きのう、学校のかえり、ランドセルの底のすきまから、国語のノートが一さつ、すべりおちました。

（まあ、いいや。）

れいじはランドセルをせおうと、お母さんといっしょに外に出ました。お母さんは、病院の給食がかりで、はたらいています。つとめ先まで、自転車で行きます。

「じゃあね。」

れいじは手をあげて、お母さんの自転車とわかれしました。

通学グループの集合場所には、もうおおかたの子どもたちが、あつまっていました。

正一はまだきていません。でも、

（そら、きたぞ！）

親ゆびの先のウオの目が、チクチク信号をおくってきます。すると、へんとうせんから、虫歯、頭ズキンズキン、おなかしくしくと、またまた、いたみがせいぞろいして、正一をむかえるのでした。

みんなそろくと、グループは学校へむかつて出発しました。

れいじは、正一からなるべく見えないように、グループのいちばんあとを、とぼとぼとついて行きました。

学校の通用門を入ると、グループはかいきます。れいじの、体のいたみも、そこでぜんぶかいきます。

れいじは、学校にいるあいだは、たのしいから、すきでした。

算数のテストに×がならんでいても、先生から、

「氷という字は、水の字の左上に点がついているの。右じやありません。どこへ点をうってでもいいってものじゃないの。」

そういつてしかられても、れいじは、学校はたのしいからすきです。れいじの体で、いたいところがあちこちで、うずきはじめるのは帰りの時間が近づいてくることです。まず、昼ねからさめたように、ウオの目が、親ゆびの先で目をさまして、チクチクしはじめます。げたばこで、上ぐつと通学ぐつをはきかえるころには、もういたところ、ぜんぶせいぞろいです。

きょうは、午後から学級こんだん会なので、せいとは、いつせい下校です。

給食がおわってそうじがすむと、一年生から六年生まで、みんな